

過労死ゼロ読書感想文④

「過労死は何を告発しているか」(岩波現代文庫、森岡孝二著、以下本書)を読んで

「今日の日本において持続可能な社会を作る第一歩は、過労死のない社会を作ることから始まる」。 (本書 P301)

2013年初版の本書の結びのこの一文は、私が本書の先見性を垣間見た箇所でもある。その理由は、「持続可能な社会」というフレーズが印象的だったからだ。

そこで、用語の定義と使われ始めた時期を調べてみたところ、以下のように、「持続可能な社会」という概念は、1980年からあるが、世に広まったのは、2015年である。

「持続可能な開発とは、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」のこと。(中略)また、持続可能な開発が行われ持続可能性を持った社会を、持続可能な社会と言う。(中略)この理念は、1980年に国際自然保護連合(IUCN)、国連環境計画(UNEP)などがとりまとめた「世界保全戦略」に初出(中略) (2015年9月25日の国連総会において、向こう15年間の新たな持続可能な開発の指針として「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/持続可能な開発>
この先見性について、「働きすぎと過労死をめぐる状況の連続性と変化にこだわりながら」(本書 P31)書かれた本書は、終章の前の第六章で「多発する若者の過労自殺と大学生の就活自殺」を取り上げ、「持続可能な社会」のために、若者という次世代に関する「過労死のない社会」を提言している。

「若者の過労死や学生の就活自殺は、若者や学生だけの問題ではない。(中略)近年の若者の過労死・過労自殺の多発と就活自殺

の増加は、日本の社会経済システムのあり方に深い問いかけを發していると言わなければならぬ」。 (本書 P261)

「日本の社会経済システムのあり方」が変わるべきと主張し、「若者層の二人の一人が非正規労働者」(本書 P235)、「IT産業の過酷な労働実態」(本書 P248)等の具体的な問題点を定義している。

若者の過労死や学生の就活自殺は、「今時の若者」という世代論で片づけられがちだが、「持続可能な社会」のために、彼らのことを親身になって思い、「社会経済システム」変革に取り組み、強いては、全世代の過労死を根絶すべきと、本書の先見性に触れて、このように感じた。